



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	歌人・宮柊二の病 : 『山西省』再読
Author(s)	逸見, 勝亮
Citation	ほけかんだより, 64, 1-1
Issue Date	2006-06-21
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/39250
Type	article
File Information	hemmi_hokekan64.pdf





歌人・宮柊二の病——『山西省』再読——

副学長 逸見勝亮

◇宮柊二（1912～86年）の妻・宮英子の『葉薊館雑記』（柊書房、2005年）を読んだ。この書は柊二看病記にして挽歌である。薊の訓は「あざみ」。

◇しかしまず、英子が掲げた柊二・栄津子の相聞歌から。

柊二「^{かうか}昼間みし合歡の赤き花のいろをあこがれの如く夜憶ひおり」。「合歡」は、芭蕉が「象湯や雨に西施がねぶの花」（『奥の細道』）と、越の美女・西施にたとえた「ネムノキ」、ここでは柊二とともに北原白秋が主催した『多摩』に集った馬込栄津子である。栄津子の相聞詠「血を吐きたりとおもふときたまきはるいのち一途に君を恋ひき」の「君」が柊二である。柊二は結核療養中の栄津子と手紙を^{いぐさたひ}かわしていた。柊二「^{いぐさたひ}堪へたる涙は落ちぬわが手紙幾度となく読みしとありて」、栄津子「秋・ふたたびうつしみのわが血をはくといたくしづけきかなしみはあり」。柊二1939年1月の1首「いづくにか後ずさりつつ涙ぐみ涙ぐみゆく足音するも」。柊二26歳、恋の終焉である。1944年2月に柊二は英子と結婚した。1948年10月にふたりは『多摩』吟行で、栄津子と再会した。その後のことは略す。英子は、上記『多摩』登載歌を引きながら、「私は思う。柊二が生涯愛したのはやはり馬込さんだったのだと。」（119頁）と記す。

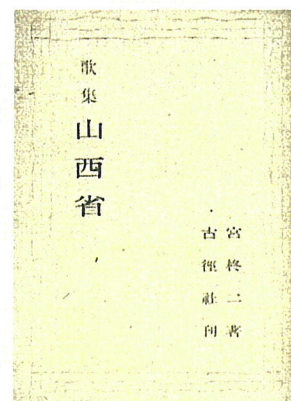
◇さて、柊二の病である。「年譜」（『宮 柊二集』別巻、岩波書店、1991年）によれば、1919年（7歳）の項に、「虚弱体質のため、毎年夏は祖父の出身地柏崎に暑を避けた」とあるが、長じてから病の記録はない。1932年の徴兵検査では第二乙種判定。これは平時には兵としては埒外の体格だが、柊二は1939年8月20日に補充兵として徴兵された。1941年12月26日、中国山西省寧武県山岳地帯の前線から「鼻及び胸部疾患の疑い」で後送、1942年5月21日まで療養、22日に原隊へ復帰して転戦。1943年10月2日に帰還。第二乙種も軍曹となっていた。1945年6月8日再度召集、小千谷・土浦で守備任務に就き、9月8日に復員した。歌人は26～33歳の間の4年5ヶ月を軍隊で過ごした。

48歳を過ぎた1960年10月頃に糖尿病発症、68

年には症状が悪化し、69年1～2月には入院もしている。74年夏には関節リウマチを、76年12月28日には軽度脳梗塞を併発。歩行、発語は次第に不自由となり、84年には両足指に壊疽も現れた。86年12月11日に急性心不全で死去。74歳であった。

◇そして、歌集『山西省』（初版は1949年）である。

詞書に「昭和十六年十二月二十六日受診の結果入院を命ぜらる」とある「戦病」の章第1首は、「虔みて吾等あれこそみんなみにいくさ戦ふときを病みつつ」。「虔」みての訓は「つつし」みて。「突然、咽喉から口もとへ血が噴き上げてきた。なまぬるい血と激痛とで発声は全く不可能になっ



（初版カバー）

た」と、歌集「続・後記」にある。戦場で得た病は尋常とも思えぬ。「……銃は絶対に射つなと命令にあり」と詞書がある「北陸」の章15首のうち「ひきよせて寄り添ふごとく刺ししかば声も立てなくくづをれて伏す」には、かつて歌集を繙いた折に僕は付箋を付しておいたのだった。「行為と知識の乖離に常に悩まねばならなかった」（「後記」）柊二の敵兵刺殺詠を、僕は以前同様に行きつ戻りつして読んだ。

◇柊二が師事した北原白秋は、眼底出血で視力をほとんど失い、脳梗塞も患った。糖尿病である。『山西省』を所収する『宮 柊二集』第1巻（1989年）は、白秋が戦場の柊二にただ「柊二よ祈ってゐる」と書き送った絵葉書を載せている。白秋は急性心不全で1942年11月2日に死去した。柊二が白秋の死を知ったのは11月4日である。『山西省』「塞下悲報」の章13首中の1首「^し凌ぎつつ強く居るとも悲しみに耐へかぬる夜は^{さん}塹馳けめぐる」。「塹」はむろん「塹壕」。◇植栽のネムノキは構内にもある。札幌の気候は酷なのであろう、7月末に咲く「合歡の赤き花のいろ」は淡く心許ない。観上ぐる人として稀であらう。